

中 巖 詩 の 特 質 — 典故とその使用法 —

森 野 知 子

中巖円月(一三〇〇〜一三七五)は、鎌倉時代を生きた臨濟宗の詩僧である。相模の国鎌倉の人で、上野に吉祥寺を開き、そのほか、万寿寺、建仁寺、建長寺等に住した。詩文を能くし、五山文学発展の基を築いた一人であると言われる。

中巖の詩には、既に従来の論文にも述べられているように、中国の文学や思想が様々な形で受容されているようである。本稿ではその中のひとつである典故の問題に絞り、中巖の詩において典故はどのように使われているか、またどのような効果をあげているか、などについて見てゆくことにする。

ここで問題にする「典故」とは、『詩経』『論語』などの経書、『史記』『漢書』などの史書、先秦時代の『老子』『莊子』など諸子における語句、故事、そうしてまた前人の詩文の語句などによるものを言う。以下、

一、中巖の詩に使われている典故の種類
二、典故の使い方

三、中巖の詩の典故についてのまとめ

という順序で論を進めてゆく。対象とした作品は『東海一漚集』巻二一六、及び後集の詩、あわせて二二五首であり、作品に付した番号は玉村竹二編『五山文学新集』第四巻の番号によった。

一、中巖の詩に使われている典故の種類

中巖の其の詩の中に使っている典故の種類を、以下、「経・史子・集」に分類し、その使用度数を記した。なお便宜上、唐代以後の詩は別の扱いにした。

〔経〕

『易』 蒙5、大壮1、困1、繫辭伝上2、繫辭伝下2、

『書経』 虞書・皋陶謨1、周書・洪範1、

『詩経』 国風、召南・鵲巢1、邶風・柏舟1、衛風・木瓜

1、唐風·揚之水1、山有樞1、陳風·衡門1、小雅·節南山之什·十月之交1、小旻1、大雅·蕩之什·蕩2、

『禮記』檀弓1、月令3、樂記2、中庸2、

『春秋左氏傳』隱公1、僖公1、成公1、昭公1、

『論語』為政2、八佾1、里仁2、公冶長1、雍也1、述而

6、子罕1、子路3、衛靈公3、微子1、

『孟子』梁惠王(上)1、公孫丑(上)2、公孫丑(下)2、

滕文公(下)1、離婁(下)1、告子(上)1、

『史』

『國語』周語(上)1、

『史記』伯夷列傳1、伍子胥列傳1、蘇秦列傳1、張儀列傳

1、平原君·虞卿列傳1、劉敬·叔孫通列傳1、淮南衡山

列傳2、滑稽列傳2、

『戰國策』齊策1、楚策1、

『漢書』楚元王傳1、游俠傳2、

『後漢書』馬援列傳(『蒙求』)1、蔡邕列傳(『蒙求』)1、

『三國志』魏志·王粲傳(『蒙求』)1、蜀志·馬良傳(『蒙求』)1、

『晉書』阮瞻傳(『蒙求』)1、顧愷之傳(『蒙求』)1、陶潛傳

(『蒙求』)2、

『列女傳』(『蒙求』)1、

『世說新語』容止1、

『子』

『荀子』勸學1、

『老子』第五十一、

『莊子』內篇·逍遙遊4、齊物論1、人間世2、大宗師1、

外篇·胠篋1、在宥1、天地2、天運1、至樂1、庚桑楚

1、外物2、讓王1、列御寇2、

『列子』湯問1、

『韓非子』說難1、內儲說上·七術1、

『淮南子』原道2、脩務1、

『集』

『楚辭』離騷(『文選』)4、九章(『文選』)2、卜居(『文選』)

2、漁父(『文選』)『古文真寶』(後集)1、

『文選』潘岳「西征賦」1、宋玉「高唐賦」1、曹植「上責躬

躬應詔詩表」1、司馬紹統「贈山濤」1、陶潛「飲酒(五)」

4、『古文真寶』(前)、江淹「雜體詩」雜述」1、孔稚珪「北山移文」1(『古文真寶』(後)、漢武帝「秋風辭」

1、(『古文真寶』(後)、陶潛「婦去來辭」3(『古文真寶』

(後)、班彪「王命論」1、

『庾子山集』「哀江南賦」1、

『古文真寶』(前集)陶潛「雜詩十二首·一」1、

『古文真寶』(後集)歐陽修「秋聲賦」1、蘇軾「前赤壁賦」

1、蘇軾「後赤壁賦」1、韓愈「進學解」2、韓愈「送李

全体的に見て、広範囲からの典故が用いられており、中巖の博識ぶりがうかがわれるが、その中でも『論語』二十一回、『莊子』二十回、『易』十一回、『詩経』十回、『楚辞』九回などが目立つ。これらの書が多用されている理由を考えると、中国においても僧のよく読んだ書であり、事情は日本でも同じであったと思われる。また『論語』は『莊子』と立場を異にする内容であるが、後で触れるように儒教の教えというよりも、世に処する態度について述べたところを取りあげている場合が多い。『楚辞』については、屈原の不遇に関する内容が主で、自分の不遇に重ねての引用かと思われる。『詩経』についてはほとんどが一例ずつで、特別の理由は無いように思われる。

次に、以上の書籍のなかでも特によく使われている言葉について見てみよう。それを通して、中巖が常々どのようなことを考えていたかを知ることができるにちがいない。

先ず『論語』では述而篇の、

用之則行、舍之則蔵。(之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち蔵る。)

という表現が五回(43・80・142・186・187)も使われている。

これは孔子が顔淵に言った『世に用いられたら活動し、捨てられたら引き籠もる』という時宜を得た行動ができるのは、ただ私とお前だけだね』という言葉からのもので、これを多用しているということは、中巖が世に処する態度―出処進退―はどうかあるべきか、ということを常に考えていたということがよくわかり、それはまた中巖が、そのようなことを考えざるを得ない場面に遭遇することが多かったことを示している。

『論語』では更に、子路篇からの三例(63・119・130)、衛霊公篇からの三例(56・88・148)がある。子路篇の三例のうち、二例(63・119)は、

子曰、必也正名乎。(必ずや名を正さんか。)

で、これは「衛の殿さまが先生をお迎えして政治をなさることになれば、先生は何かから先になさいますか。」と子路に問われた時の孔子の答えである。中巖は、名を正す―大義名分を明らかにする―ことの必要性を感じていたのであろう。もう一例は、

子曰、吾不如老圃。(吾れは老圃に如かず。)

であり、これは樊遲が野菜作りを習いたいと願いだしたのに対して、孔子の言った言葉である。

盤谷泉甘可隠人

盤谷の泉は甘く 人を隠すべし

龍蛇久蟄以存身

龍蛇久しく蟄し 以て身を存す

已応東面風吹凍

已に応に東面には 風の凍を吹くな

るべし

相次南枝花発春

相次ぎて南枝は 花春に発かん

衆醉難容屈原醒

衆は酔ひて屈原の醒めたるを容れ難

く

道漓惟見孟軻淳

道漓くして惟だ孟軻の淳きを見るの

み

往来満屋賢豪裏

満屋の賢豪の裏を往来し

莫罵丁丁啄木頻

丁丁として木を啄くことの頻りなる

を罵るなかれ

「盤谷の泉は甘く、人を隠すことができるので、龍・蛇のごとく長い間、土の中に隠れて身を安全に保っている。もう東側では、春風は凍を吹き解かしていることだろうし、南向きの梅の枝には、次々と花が開くことだろう。人々は酔っており、屈原が独り醒めているのを受け入れることは難しい。世間の道が漓いので、ただ孟子の淳正さのみが際立つのだ。部屋いっぱい賢く優れた者達の中を往来しながら、しきりに木を啄いている私を罵らないでほしい」。

第一句は、『古文真宝』にも収められている、韓愈の「送

李愿歸盤谷序」の中の「盤谷」について説明をしている「太行之陽有盤谷。盤谷之間、泉甘而土肥、艸木叢茂、居民鮮少……隠者之所盤旋。」(太行の陽に盤谷有り。盤谷の間、泉甘くして土肥え、艸木叢茂して、居民 鮮少なり。……隠者の盤旋する所なりと。)を踏まえ、盤谷のような場所で、隠者のように暮らしている自分の状態を表している。第二句は、『易』繫辭伝・下の「龍蛇之蟄、以存身也」(龍蛇の蟄するは、以て身を存せんとすればなり)という部分を踏まえて、時機の到来を待って隠れ棲んでいる自分の状態を言い表している。第五句は、『楚辭』などに収められている、屈原「漁父辭」の、屈原が清廉潔白なためにそしりに遭い、追放されてさまよっている時に漁夫に会って話すことば「衆人皆酔、我独醒、是以見放」(衆人皆酔ひて、我独り醒めたり、是を以て放たると。)を踏まえ、自分を屈原に重ねあわせて、世の中に対する嘆き、自分が不遇であることへの嘆きを表現している。第七・八句は、あなたをはじめとして「賢豪」の士は世に溢れているのだけれどもと言いつつ、左貴嬪の「啄木詩」の「南山有鳥、自名啄木。饑則啄樹、暮則巢宿」(南山に鳥有り、自ら啄木と名づく。饑うれば則ち樹を啄ぎ、暮るれば則ち宿に巣くふ)により、腹をすかせて木をつついてはいる鳥に、欲求不満でいらしている自分の姿を重ねている。

この詩では、自分の今の状況を説明しつつ、世の中の状態

と我が身の不遇への嘆きを詠んでおり、人に贈る詩に、不平・不満を直接に表すのでは相手に失礼なので、直接的な言い方を避けるために典故を使っているように思われる。一首の中に多くの典故を使った場合、とかく詩の流れが悪くなるものであるが、此の詩の場合は、そのようなことはあまり感じない。述べんとすることと典故の内容が一致しているためである。

90 依前韻贈東白

典刑元屬老成人

爲道辛勤不爲身

今吟古誦言皆玉

往送来迎面一春

遠掣鯨鯢參景德

冷看翡翠笑咸淳

夜來風雨応思我

我亦懷君入夢頻

前韻に依りて東白に贈る「一」

典刑は元もと老成人に屬す

道の爲に辛勤して 身の爲にせず

今吟 古誦 言は皆玉のごとく

往送来迎 面は一に春のごとし

遠く鯨鯢を掣し 景德に参ひ

冷やかに翡翠を看て 咸淳を笑ふ

夜來 風雨 応に我を思ふべし

我も亦た君を懷ひて 夢に入ること

頻りなり

「守るべき善き手本は、もともと老練成徳の人の持つもの。今や老成人はいないけれども、しかしあなたはその手本によって道のため辛苦して勤め、自分の利は求めない。近頃の詩も昔の詩も、ことばは皆な玉のようで、帰ってゆく人を送り、やって来る者を迎えるときの顔は、いつも春のよう。遠

く大魚のように雄健な詩文をとりおさえて景德の頃の詩を参考にし、冷ややかにカワセミのように美しいだけの詩文を見て咸淳の頃の詩を笑う。昨夜からの雨に、あなたは私のことを思ってくれているだろうか。私もまた、あなたを懐しく思い、度々夢に見ています。第一句では、『詩経』大雅・蕩に見られる「雖無老成人、尚有典刑」（老成人無しと雖も、尚ほ典刑有り）〔今や殷には老練で成徳の人は無いけれども、尚ほ先王以来の守るべき善い典法は伝わっている。〕の中の語を使って一篇の前置きとし、第二句でそれを受けて「（その手本によって）道のため辛苦して勤め、自分の利を求めるようなこととはしない。」と、まず相手の行いについて賞讃している。第四句では、『中庸』に見られる「送往迎来、嘉善而矜不能、所以柔遠人也」（往を送り来を迎へ、善を嘉して不能を矜むは、遠人を柔する所以なり）〔帰ってゆくのを送りやって来るのをよく迎えるのは、遠人を和らげる道である。〕の中の表現を、これが身を修め天下を治める方法だと言っている点を踏まえて使い、東白の人柄を、大変穏やかで暖かいもののだといつてほめている。第五・六句では、杜甫「戯爲六絶句（四）」の、今の人の中に大文豪のいないことをいう「或看翡翠蘭若上、未掣鯨魚碧海中央」（或は翡翠を看る 蘭若の上、未だ鯨魚を掣せず 碧海の中）の中の表現を使って、相手の詩作について讃えている。なお、「景德」は北宋初めの年号で、

例(168・210・9)、「雜詩(飲酒)」の四例(163・168・206・218)が目立つ。まず「婦去來辭」は、三例とも、

婦去來兮、田園將蕪、胡不婦。 (婦りなんいざ、田園將に蕪れなんとす、胡ぞ婦らざる。)

という冒頭部分を使っている。そのうち二例(168・210)は「本來婦るべき所へ婦らう」ということで「婦去」の語を使っており、残り一例(9)はこの冒頭部分の全体を使っている。

「雜詩(飲酒五)」は、

結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然見南山。山氣日夕佳、飛鳥相與還。此間有真意、欲弁已忘言。

(廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧しきこと無し。

君に問ふ 何ぞ能く爾るや、と。心遠ければ地自ら偏なり。菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る。山氣

〔唐〕

劉長卿「酬李穆」1、

孟浩然「春曉」1、

李白「將進酒」1、「贈華州王司士」1、「古風・搖裔雙白

鷗」1、

杜甫「北征」1、「春望」2、「茅屋為秋風所破歌」1、「示

日夕に佳く、飛鳥相與に還る。此の間に真意有り、弁せんと欲すれば已に言を忘る。)

というもので、陶淵明はこの詩で、村外れの自然の中で日々を送る、安らかな心境を歌い、自然の風景の中にある真理の意味を悟った感激を言っているが、真理が何かということについては、それは言語で表現できるようなものではないとしている。

「婦去來辭」「雜詩」は陶淵明の代表的な作品で、禅僧たちにも記憶されていたであろうが、同じ部分を三回、または四回使っているのは、やはり中叡の好みが表れていると考えられ、中叡は、自然に婦ること、自然に溶け入ることを願う、陶淵明の思想を好んでいたものと思われる。

次に、唐代以後の詩について、引用されている作品名、回数を示す。

宗武書」1、「無家別」1、「垂老別」1、「麗人行」1、

「醉時歌」1、「春日憶李白」3、「奉贈韋左丞丈」1、

「兵車行」1、「戲為六絕句」1、「夢李白」1、「漫成」

1、「絕句漫興九首」1、「送高三十五書記」1、「戲作

俳諧體遺悶二首」1、

韓愈「剝啄行」1、

柳宗元「江雪」1、「酬曹侍御過象鼻見寄詩」1、
 韋應物「三台詞」1、
 白居易「長恨歌」1、「三年為刺史」1、
 杜牧「秦淮」2、「題開元寺」1、「江南春」2、
 曹松「已亥歲」1、

このうち引用例が最も多いのは、何といっても杜甫であり、次いで蘇軾、杜牧、李白と続いている。杜甫のどこが中巖の心を引きつけたのかというと、それは杜甫の生き方と、その詩に込められた執念などと思われる。「一六七、偶看杜詩、有感而作」には、杜甫の生き方に励まされながら苦しい境遇に耐えてゆこうとする中巖の思いが詠まれているし、「九七〇九九、三月旦、聽童吟杜句有感、統之三絶」は、杜甫の「絶句漫興九首（四）」詩の起句を童が吟じているのを聴いて、感じるところがあって作ったものといい、その詩にも杜甫への追慕の情が表現されている。また、蘇軾にも、中巖は強く影響を受けていたようであり、それは彼の「藤陰瑣細集」「文明軒雜談」の記述からうかがえることであるが、これら杜甫、蘇軾等の詩人の影響についての詳細は、別稿に記すことにする。

〔宋〕

蘇軾「春夜」1、「書劉景文左藏所藏王子啓帖」1、「送喬全寄賀君六首」1、「將往終南和子由見寄」1、
 陸游「遊山西村」1、

二、典故の使い方

中巖の典故の使い方方を調べるために、詩一首の中に、

- ① 多数の典故を使用する場合
- ② 少数の典故を使用する場合
- ③ 一つの典故を、その詩全体にわたって使用する場合

にまとめて見てゆくことにする。中巖は典故を使う場合、どのような典故をどのように用いており、そこにどのような効果が見られるか。逆に言えば、どのような目的のもとに、典故をどのように用いているか、という点を中心に考察することにする。

① 多数の典故を使用する場合

一首の詩に多数の典故を、それも種類の違う典故を使用する場合である。例を挙げてみよう。

衛靈公篇の三例のうち、二例(58・88)は、

子曰、人能弘道、非道弘人也。(人能く道を弘む。道の人を弘むに非ず。)

であり、もう一例(116)は、

子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思。無益。不如學也。(吾れ嘗て終日食らわず、終夜寝ず、以て思う。益無し。學ぶに如かざるなり。)

である。このように『論語』からの引用はどれも、人間の生き方について言っているものである。

『莊子』では二十例中、逍遙遊篇が四例(116・9・111・87)ある。すなわち、

鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九万里。

(鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶搖を搏ちて上ること九万里。)

また、

風之積也不厚、則其負大翼也無力。故九万里、則風斯在下矣。而後乃今、培風背負青天、而莫之夭闕者。而後乃今、將圖南。(風の積むや厚からざれば、則ち其の大なる翼を負うに力無し。故に九万里なれば、則ち風斯に下に在り。而る後乃ち今、風に培り背に青天を負ひて、之を夭闕する者莫し。而る後乃ち今、將に南を図らんとす。)

これらは鵬が北海から南海に向かって飛び立つ様を描写し

ているのだが、それを嘲笑する鰓と鷲鳩を登場させて、偉大なものと卑弱なものとの対照を際立たせている。

夫列子御風而行。冷然善也。(夫の列子は風を御して行く。冷然として善きなり)

これは、人間はこの世界を超越して無限の自由を享受すべきだと言っている部分の中の表現である。

宋人資章甫而適諸越。越人斷髮分身、無所用之。(宋人章甫を資として、諸越に適く。越人は斷髮分身にして、之を用ふる所無かりき。)

これは、儒者の冠も所が変われば全く役に立たないことを示す話であり、このことから人間の企図の無益なことを言っている。

中巖は、『莊子』逍遙遊篇から、人間の作為の小ささとそれを越えた大きな世界の存在を叙述している部分を使っており、彼もそのような、物の見方・考え方を好んだのではないかと思われる。

『易』では十一例中、「蒙卦」が六例を占めている。そのうち二例(62・48)は

蒙以養正、聖功也。(蒙より以て正を養ふは、聖の功なり。)

であり、童蒙のときからその本有の正しい心を養い育てるのは、童蒙を将来聖人にする方法であると言っている。

もう二例(55・III)は、

大象 山下出泉、蒙。君子以果行育德。(大象 山下に出づる泉は、蒙なり。君子以て行ひを果たし徳を育ふ。)で、君子は(泉の水がはじめはちよろちよろと湧きでて、しばらくも休まず、流れては川となり、大海に至るように)自分の行いを果たし遂げ、静かに自分の徳を養い育てるのだと言っている。

中巖は、『易』蒙卦の、「蒙」は知恵がまだ明らかでなく暗い状態であるが、発達する素質は備えているのだから、開発してゆくのがよい。という思想に同感したのではないかと思われる。他に二例、

九二 包蒙、吉。納婦、吉。子克家。(九二 蒙を包る、吉。婦を納る、吉。子 家を克くす。)

上九 擊蒙。不利為寇。利禦寇。(上九 蒙を撃つ。寇を為すに利しからず。寇を禦ぐに利し。)

という部分も使われている。

『楚辭』は九例の引用があり、そのうち四例(III・56・III・56)が「離騷」である。

皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。名余曰正則兮、字余曰靈均。(皇は覽て余を初度に揆り、肇めて余に錫ふに嘉名を以てす。余に名づけて正則と曰ひ、余に字して靈均と曰ふ。)

紛吾既有此内美兮、又重之以修能。扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以為佩。(紛として吾既に此の内美有り、又之に重ぬるに修能を以てす。江離と辟芷とを扈り、秋蘭を紉いで以て佩と為す。)

これは「離騷」の冒頭部、屈原が自分の美点長所を挙げている部分からの引用である。

前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬。鸞皇為余先戒兮、雷師告余以未具。(望舒を前にして先驅せしめ、飛廉を後にして奔屬せしむ。鸞皇余が為に先づ戒め、雷師余に告ぐるに未だ具はらざるを以てす。)

これは、志を同じくする者を探し求めながら、天界に登って天帝にまみえようとするが妨げる者がいて会うこともできず、嘆きを深くする段の一部である。

戶服艾以盈要兮、謂幽蘭其不可佩。(戸ごとに艾を服して以て要に盈て、幽蘭は其れ佩ぶ可からずと謂ふ。)

これは、進退に迷って占わせると、楚を立てて遠く旅するよう勧められるが、楚国の現状を嘆きつつ、果たして外で知己に巡り合えるだろうかと疑う段の一部である。

中巖は、自分の不遇を屈原の不遇と重ね合わせて見ており、「離騷」が屈原の自序伝であることから、この文章の表現を自分の作品にもよく使っているのであろう。

『文選』は十七例あるが、中で陶淵明の「婦去來辭」の三

中巖が意識していた詩としては、この時期、九僧と呼ばれる一群の僧の詩、或は日本人に古くから知られた林逋の詩などが考えられる。「咸淳」は南宋末の年号で、この時期は民間の小詩人によって詩が作られていた。第七句には、孟浩然「春暁」の「夜来風雨聲、花落知多少」の中の表現を軽く挿んで、相手の自分への思いを想像し、第八句に杜甫「夢李白」の、昔なじみの相手を夢に見たことを自分達がいつまでも忘れずに思いあっている友情の証拠だといっている。「故人入我夢、明我長相憶」（故人我が夢に入る、我が長く相憶ふこととを明らかにす。）の中の「入夢」という語を使って、相手への自分の思いを詠み、二人の友情を示してこの詩を結んでいる。

この詩では、第一〜六句で、詩を贈る相手の行いと人柄について、『詩経』『中庸』など重い典故を使って讃え、また尊敬する杜甫の詩を用いて、相手の詩作の素晴らしさを強調し、第七・八句で、自分と相手の友情、特に自分の相手への思いを表現している。いずれの典故もここでは作者の気持ちの強調という点で効果的に働いている。

ここに取り上げた二首を含む「84〜95」の贈答詩群は、作られた時期はわからないのだが、典故によって今の自分の状況を説明したもの、世の中の状態を嘆いたものや、典故を並べ立てて相手をほめたり相手の不遇に同情するなど、相手を

立てたものが多いことから、中巖の嗣法問題事件の後のものではないかと思われる。

この嗣法問題事件とは、中巖は、曹洞宗宏智派の東明慧日に嗣法すべきであったのに臨済宗大慧派の東陽德輝の法を嗣ぐ意を表明したため、同門の曹洞宗宏智派の人たちから非難され、危害を加えられそうになるというもので、この時、この贈答詩に出てくる東白圓曙が別源圓旨と共に衆をなだめて無事その場を収めたという記録がある。

このように多数の典故を、直接的な言い方を避けるため、或は作者の気持ちを強調するために使用しているものには、この他に「56、和答東白」「66、寄藤刑部」「148、和答鈍夫(二)」「187、和答明巖」などがある。

148 自壽 自ら寿ぐ

夜半之精天一水 夜半の精 天一の水

利金流気学乾方 金を利し氣を流して乾の方を学ぶ

策全大衍曆初度 策は大衍を全うす 曆の初度

置而不用自行藏 置きて用いず 自ら行藏せん

「天一のつかさどる水の精をうけて生まれ、金の気をはたらかせて天命を学んだ。生まれてから五十年を過ごしたが、五十歳ということは忘れて出処を誤らないようにしよう」。第一・二句は、『易』繫辭伝・上に「天一、地二、天三、地四……」(天は一、地は二、天は三、地は四、…)とある語を

使い、「金・水」は「西・北」を、即ち庚子をあらわし、中巖の生まれた年が正安二年庚子であることを表している。第三句に『易』繫辭伝・上の「大衍之数五十」という語と、『楚辞』離騷の「皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名」（皇覽て余を初度に揆り、肇めて余に錫ふに嘉名を以てす）を使って五十歳になったことを言い、第四句に『論語』述而の「用之則行、舎之則蔵」（之を用ふれば則ち行い、之を舎つれば則ち蔵る）をふまえた「行蔵」を使って、出処進退ということについてふれ、五十歳になった心構えを詠んでいる。

この詩では、嚴肅な感じを出すために『易』『楚辞』『論語』からの重い典故を、難解な表現で多用し、五十歳になった心構えを詠じた作にふさわしいものとしているが、同時にそれは、技巧にはしりすぎて難解さを増してしまった感がある。

② 少数の典故を使用する場合

ここでは一首の中に、一つか二つの少ない典故を用いている作品を取り上げて、そこでの典故の使用がどのような効果をあげているかを見てみる。

14 金陵懷古

人物頻遷地未磨

人と物は頻りに遷れども地は未だ磨

せず

六朝咸破有山河	六朝は咸な破れたるも山河は有り
金華旧址商漁宅	金華の旧址は商漁の宅
玉樹残声樵牧歌	玉樹の残声は樵牧の歌
列壑雲連常帶雨	列壑 雲連なりて常に雨を帯び
大江風定尚生波	大江は風定まるも尚ほ波を生ず
当年佳麗今何在	当年の佳麗 今何にか在る
遠客蒼茫感慨多	遠客は蒼茫として感慨多し

「人と物はしばしば変わったが、土地はまだ無くなってはいない。六つの王朝は皆な破れたが、山や河はのこっている。宮殿の古い跡は商人や漁夫の住まいとなり、「玉樹」の歌の名残の声は、きこりや牧人たちに歌われている。つらなる谷には雲が連なっており、いつも雨を帯びており、大江では風が静まっても、なお波が生じている。その昔の美人はいつたいどこにいたのであろうか、遠くから来た旅人は、広々として果ての無いさまに深く感じる人が多い。」

これは作者が中国の金陵に旅していた頃のものであろう。第二句には、杜甫「春望」の「國破山河在、城春草木深（國破れて山河在り、城春にして草木深し）」を踏まえており、戦乱によって破壊されてしまった人間の世界と、変わることはない自然の山河を対比して、人間社会のはかなさ、無常さを強調している。また第四句の「玉樹残声」は、この地に都し、そうして滅びていった陳の後主の故事を踏まえて、榮華

のはかなさを述べている。「玉樹」とは、六朝末の陳の後主が夜毎の宴会に宮女たちに歌わせていた「玉樹後庭歌」のことで、やがて隋のために滅ぼされてしまったので、亡国の歌とされている。

これらの典故はこの詩において、人の世のはかなさを嘆く思いと、懐古の情をただよわせるための、重要な要素となっている。

134 五言三絶句 (一)

紅葉青苔上 紅葉 青苔の上

短軒荒砌辺 短軒 荒砌の辺

淒涼何以楽 淒涼として何を以て楽しまん

満案只陳編 案を満たすは只だ陳編のみ

「紅葉が青い苔の上に散り落ちていて、短い軒の荒れた砌のそばに。まことに物寂しく何を以てあなたを楽しませればよいのだろう。机を満たしているのはただ古くさい詩編だけ。」

第一句に一箇所、『三体詩』にも収められている、劉長劉「酬李穆(李穆に酬ふ)」詩の「欲挾柴門迎遠客、青苔黄葉満貧家(柴門を払って遠客を迎えんと欲すれば、青苔黄葉は貧家に満つ)」句の「青苔黄葉」という表現を踏まえている。「貧乏ぐらしのことゆえ、青い苔や黄色い落葉が庭じゅうにひらがっていてどうしようもない」と、何のもてなしも出来ないことを謝っている劉長卿の表現を使うことによって、読者が

典故とした作品の場面を思い起こして、中叡の詩に重ね合わせてくれることを期待しているのであろう。そうして更に、第三句で詠んでいるような中叡の心情を理解し易くしている。

28 鞞津

楸梧風冷海城秋 楸梧に風は冷たし 海城の秋

燹火煙消灰未収 燹火 煙は消ゆるも 灰は未だ収め

ず

遊伎不知亡国事 遊伎は知らず 亡国の事

声声奏曲泛蘭舟 声声 曲を奏して 蘭舟を泛ぶ

「ひさぎとあおぎりに風が冷ややかに吹いている海辺の城の秋、戦乱のために起こった火事の煙は消えたが、その灰はまだ片付いていない。遊女は滅びた国のことも知らず、声々に曲を奏しながら歌い、木蘭で造った美しい舟を海に浮かべている。」

第三句で「亡国事」といっているのは、鎌倉幕府が滅んだことを指していると考えられるが、「亡国」に関わって、『三体詩』にも収められている、杜牧「秦淮」詩の「商女不知亡国恨、隔江猶唱後庭歌」(商女は知らず亡国の恨み、江を隔てて猶ほ唱う後庭歌)が踏まえられている。それは既に「金陵懷古」で触れた、陳の後主の「玉樹後庭歌」を背景にしたもので、それによって、人の世の移り変わりに対する感慨が詠いこまれている。

以上、一つか二つの典故が用いられている場合を見てきたが、作品の重要な部分に典故を踏むことよって、その作品は内容的に深みの感じられるものとなっている。すなわち多数の典故を使用する場合にねらいとされた、婉曲な表現、強調表現、或は遊戯的な意図などは異なる意図やねらいが、少数の典故を使う場合にはあったようである。

③ 一つの典故を、その作品全体にわたって使用する場合

一つの典故とは、古人の一作品とか一つの故事を指すが、それを詩の全体に散りばめて一つの作品にまとめている場合である。

211 雨中戒昼寝 雨中 昼寝を戒む

風吹雲雨入陽台 風は雲雨を吹きて陽台に入り

惱得襄王亦怪哉 襄王を悩まし得たるとは亦た怪なる

かな

莫使昼眠等閑熟 昼眠をして等閑に熟せしむること莫

かれ

引他神女夢蒸来 他の神女を引ききて夢に蒸き来たらし

めん

「風は風雨を吹いて陽台に入る。それが襄王を悩ませたとはまた不思議なことだ。昼眠をするのに、眠りにまかせて熟睡

してはいけない。そんなことをしていると、あの神女を引き寄せて夢にわいて来させることになるぞ。」

『文選』卷十九に収められている、宋玉の「高唐賦一首」を、一首全体に使っている。これは楚の襄王が雲夢台に遊んで、昼寝の夢に巫山の神女に会い、寵愛したが、彼女は立ち去る時に「私は朝は朝雲となり、暮れには雨となり、朝な夕な陽台の下にいます。」と言った。朝になって見るとその通りだったので、王は断腸の思いがした。という話の内容を踏まえ、「雲雨」「陽台」「襄王」「昼寝」「神女」など賦の中の語を使用しながら「昼寝は適当にしておかなければならない、気持ちがいいのにまかせて熟睡したら、楚の襄王のように夢で神女が出てくることになるぞ。」と昼寝を戒めているのである。

一つの作品、或は故事と言ったほうがよいかもしれないが、それを素材として怠惰を戒める詩にまとめたものであり、「御用心、御用心」といった作品で、遊戯的な使い方と言えよう。

68 寄東白 東白に寄す

椅桐寄生千仞嶽 椅桐は生を千仞の嶽に寄せ

處身孤危遠鳥雀 身を孤危に處して鳥雀より遠ざかる

鳥雀適為鷗所逐 鳥雀 適々鷗の逐う所と為り

暫時来投欣有托 暫時来り投じ欣として托する有り

幽谷積陰長帶秋

幽谷は陰を積みて長く秋を帯び

風吹寒藤響索

風は寒藤を吹きて響きは索索たり

自然勢不雀輩便

自然の勢いは雀輩の便ならず

莫言椅桐難棲泊

言う莫かれ 椅桐の棲泊し難しと

久矣傾枝欲待誰

久しいかな 枝を傾けて誰を待たん

と欲する

世間無復見鸞鷲

世間 復た鸞鷲を見ること無し

「椅桐は千仞の険しい山に生えており、ひとり高い場所にて小鳥達から遠ざかっている。けれどもその小鳥達がたまたま隼に逐われて、暫く喜んで身を寄せることもある。しかし奥深い谷は陰気を重ねていて長く秋のよう、風は寒々とした藤を吹いて寂しそうな音を立てている。このような自然は雀達をくつろがせないが、椅桐が棲みにくいとは言ってほしくない。長い間、枝を傾けて誰を待とうとしているのだろうか、世の中にはもう、鳳凰の雛を見ることはないのだろうか。」
中巖は、自分を「千仞嶽」に生えている孤高の存在である「椅桐」に見立て、「鳥雀」つまり世間の人たちが近寄りにくいのは彼らの都合であって私のせいではない。私はこれまで「鸞鷲」にも匹敵する優秀な人物が私を求めてやって来るのを待ち続けたが、そんな人は今や世間にはいないのかもしれない。と嘆じているが、この詩は晋の司馬彪（字、紹統）の「山濤に贈る」詩（『文選』卷二十四）をそのまま踏まえて

いる。その詩は二十四句から成っているが、中巖が直接踏まえているのは前半である。すなわち、

苔若椅桐樹

苔若たり椅桐の樹

寄生於南巖

寄りて南巖に生ず

上凌青雲霓

上は青雲の霓を凌ぎ

下臨千仞谷

下は千仞の谷に臨む

處身孤且危

身を處くこと孤にして且つ危く

於何託余足

何くにか余が足を託さん

昔也植朝陽

昔は朝陽に植ちて

傾枝俟鸞鷲

枝を傾けて鸞鷲を俟てり

今者絕世用

今は世の用を絶たれ

倥偬見迫東

倥偬として迫東せらる

以下、司馬彪は「どうか埋もれている私の才能を認めて採用し、存分な働きをさせてほしい。」と訴えている。一方中巖は、司馬彪の詩の中の主要な語句を取り出して最初の二句と最後の二句にはめ込み、自分を司馬彪に重ね合わせているようであるが、しかし全て司馬彪の作によっているわけではない。作品の中間部分には「鸞鷲」に対して「鳥雀」（大したことのない普通の人物）を設定し、彼らは自分の所にはなかなか近寄ろうとしないことを述べているし、また内容的にも「将来有為の人は、もはや今の世の中には存在しないのだろうか」と言って、司馬彪がこの詩の、特に後半で、何とかし

て我が才を認めて欲しいと願ひ続けるのとは別の事を言っている。その点で、司馬彪の詩を全体的に踏まえているとはいながら、詩の構成面、内容面において中巖の個性は、はっきりと出ている。

次の作品は、前人の作品や故事を典故として踏まえたものとは少し異なつて、宋の宋迪が画いた瀟・湘の八つの風景、「平沙落雁」「遠浦帰帆」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「漁村夕照」「煙寺晚鐘」が二つずつ描かれた四幅の図を示され、詩を作るよう頼まれて、詠んだものであらう。

瀟湘八景

山市晴嵐吹　　山市に晴嵐吹き

洞庭秋月照　　洞庭に秋月照る

開図亦展　　図を開けば図亦た展び

通神画工妙　　神に通ずる画工の妙

「山の村に山気が吹き、洞庭湖に秋の月が照っている。図を開けば図はまたのびてゆき、絵の技術は神に通じるほど細かくすぐれている。」

漁網曬斜暉　　漁網　斜暉に曬らされ

歸舟帆影遠　　歸舟　帆影は遠し

陰森夏木中　　陰森たる夏木の中

幽鳥声睨睨　　幽鳥　声は睨睨たり

「漁をする網は夕日のひかりに照らされ、帰ってくる舟の帆の影は遠い。夏の木が茂つて薄暗い中で、奥深い所に棲む鳥の鳴き声が聞こえる。」

寺遠鐘声韻　　寺遠くして鐘の声は韻に

雨疎野樹暗　　雨疎にして野の樹は暗し

想見湘夫人　　湘夫人を想ひ見て

嘯吟情慘愴　　嘯吟すれば情は慘愴たり

「寺は遠く、鐘の響きがかすかに響く、雨はまばらに降り、野原の樹木は暗い。湘夫人を想ひ浮べながら、嘯き吟じていると心が痛んでくる。」

江雪乍暗後　　江雪　乍ち暗き後

枯葦声送寒　　枯葦　声は寒を送る

落雁無可食　　落雁　食ふ可きもの無し

苔荒沙家残　　苔は荒れ　沙家は残る

「川に雪が降り出してたちまちあたりは暗く、枯れた葦の音が寒々と聞こえてくる。空から地に下る雁に食べ物は無く、苔は荒れ、浜辺の家は崩れかけている。」

四幅の図のうち一枚目は「山市晴嵐」と「洞庭秋月」、二枚

目は「遠浦帰帆」と「漁村夕照」、三枚目は「瀟湘夜雨」と「

煙寺晚鐘」、四枚目は「平沙落雁」と「江天暮雪」が描かれて

いるのだらう。中巖は或はそのまま、或は少し手を加えて詠んでおり、図に忠実な中に、いかに目新しさを詠み込もうか

と考へて作つた、遊びの要素の強いものである。

一つの典故を、その詩全体にわたつて使用する場合には、遊びの要素の強いもの、少々遊びの要素の入つてゐるもの、遊びの要素の強いもの、を見てきたが、このような典故の扱ひかたは、或は中蔵の好みの方法であつたのかもしれない。

三、結語

中蔵の詩に使われている典故について、どのような典故が、どのように用いられているのか、以上見てきたが、先ず使用されている典故の種類についていへば、經史子集の書から、幅広く採られていた。それは、中蔵の広範な學問と、該博な知識を物語るものである。

次に典故の用い方については、一首の詩に多くの典故を使用して、強調、婉曲、重みを加えるなどの効果を挙げたり、一・二の少ない典故によつて一篇に奥行と幅を持たせたり、或は、一つの典故を其の作品全体にわたつて用いたりするなど、多彩な使い方をしている。使用の態度についても、時には遊戯的なものもあつて、典故を自在に使いこなしている様子を見ることが出来る。

典故の使用に、このように熟達している中蔵ではあつたが、彼の詩の全てに典故が用いられているわけではない。典

故を必要とする場合は使ひ、そうでない場合には使わなかつた。それでは典故を必要としない作品とはどのようなものかという点、自分の生活を詠ひ、そのなかでの思ひを述べるようなものであり、そこでは典故はほとんど使つていない。

73 利根山行春(一)

陰崖或有残雪 雲崖 或は残雪有るも

春溪半帶流漸 春溪は半ば流漸を帶ぶ

風日乍寒乍暖 風日 乍ち寒く乍ち暖し

杖屨且留且之 杖屨 且つ留まり且つ之く

「日の当たらぬ崖には雪の残つてゐる所があるが、春の谷は半ば氷が解けて水が流れめぐつてゐる。天氣は寒かつたり暖かつたりで、私は外出することを止めたり行つたりしてゐる。」

77 三絶句(一)

鐵頭撥雪掘鞭筍 鐵頭もて雪を撥きて鞭筍を掘る

茶滾浪花瓶泣蟲 茶滾きて浪花あり 瓶は泣蟲のごと

窓外風和黃鳥啼 窓外 風和みて 黃鳥は啼る

十分春色到山中 十分なる春色 山中に到る

「鐵で雪を除き、竹の根を掘る。茶が沸いて浪の花ができ、瓶は虫が泣くように音を立てる。窓の外では風がなごみ、小鳥がさえずる、十分なる春色は山の中まで到つてゐる。」

これらは閑適の作とでもいふべきもので、中叡の自然な心情が、そのままに詠われており、典故を踏む必要のない作品と思われる。

次に挙げる詩は「利根山行春」「三絶句」などは少し傾向が異なるが、或る人、或る事に対して、中叡の飾ることのない心情がそのままに述べられているものであり、この場合も典故は殆ど使われていない。

64 送沢雲夢（沢雲夢を送る）

乾坤干戈未息時 乾坤の干戈 未だ息まざる時

氛埃眯目風橫吹 氛埃 目を眯ませて 風は横ざまに吹く

餓者転死盈道路 餓者は転死して道路に盈ち

荒城白日狐狸嬉 荒城は白日より 狐狸 嬉ぶ

我問楽土在何許 我 問ふ 楽土は何許にか在る

一身可以安棲遲 一身 以て安くに棲遲すべけん

固欲適他無所適 固より他に適かんと欲するも適く所無し

之子先我将何之 之子 我に先んじて將に何に之かんとす

倉卒告別難為情 倉卒に別れを告げられ情を為し難く

袖出剡藤索吾詩 袖より剡藤を出して吾が詩を索む

浮雲流水無定迹 浮雲流水のごとく定まる迹無く

再得会合誠難期

久厄艱危我羸臥

磨墨揮毫皆不為

感君眷眷有厚意

勉強起來拂烏皮

惜君学道不日成

如何早離金仙師

想君似我乏供給

不得已故得相辭

望君此去逢佳境

招我薯蕷同充饑

再び会合を得ること誠に期し難し

久しく艱危に厄せられて我は羸臥し

墨を磨り毫を揮ふこと皆為さず

君が眷眷として厚意有るに感じ

勉強めて起き来りて烏皮を拂ふ

君が道を学びて日に成らざるを惜しむに

如何ぞ早に金仙の師を離るるや

想うに君は我に似て供給乏しく

已むを得ざるが故に相辞するを得ん

君の此より去りて佳境に逢ふを望む

我を招き薯蕷もて同に饑を充たさん

「天地に戦いがまだやまない時、埃は目をくらくし、風はほ

しいままに吹く。飢えた者は倒れて死に、道路いっぱいにな

っており、荒れた城では昼間から狐狸が遊んでいる。私は問

う『安楽の地はどこにあるのか、我が身はどこで人目につか

ず安らかに暮らすことができるのか』と。もともと他の土地

に行こうとしても行く所は無い、それなのにあなたが私より

先に行かれるとは、どちらへ行こうとされているのか。急に

別れを告げられ氣持ちを表すことは難しい、袖から剡藤の紙

を出して私に求められても。浮雲や流水のように決まったあ

ては無いから、再び会えることは誠に期待し難い。長い間の

苦しみと危険に私は疲れて寝込んでしまい、墨をすり筆をふるようなこともしていなかった。しかし、あなたが懇ろに厚く思ってくれることに感じて、無理に起ち上がって黒皮の机に寄りかかる。あなたが道を学んですぐには成就しないのを残念に思う、どうして早くも仙道の師のもとを離れたりするの。か。思うにあなたも私のように、供え充てがわれた物が足りず、仕方なく去って行かれるのに違いない。あなたがここから去って佳いところに出逢われることを望んでいる、(佳いところに落ち着いたら)私を招いて山の芋を御馳走して下さい」。

これは沢雲夢が、生活のためであろう、師のもとを去って浮雲流水の旅に出てゆくのを、中巖が送った時の作であるが、辛い思いをそのまま述べている。そこには典故を使って表現を飾り、言わんとする内容を強調したり、或は婉曲に伝えたりする必要もゆとりも無かったのであろう。

要するに中巖にとって典故は、主に、外に対しての作品、よそゆきの詩において使うものであった。そのような作品においては、自己の主張に重みをつけ、正当化し、また自分の気持ちや婉曲に述べるために、更には表現の飾りとして、典故はどうしても必要であった。また、同じ外向けのものであるが、遊びの要素を含んだものもあるが、それは自分の典故技法を、その詩を読む人に示すためのものであつたらう。

このような中巖の典故の用法は、五山の他の詩人の詩に比べてどのようなものであったのか。その点については現在のところ他の詩人の典故の用い方を調べていないので、結論は後日に残さざるを得ない。また前代の漢詩における典故の使い方との比較も行わなければならないのであるが、これも次の機会に譲ることにする。